ラッパ屋第３５回公演

世界の秘密と田中

キャスト

福本伸一
おかやまはじめ
木村靖司

三鴨絵里子
岩橋道子
弘中麻紀

俵木藤汰
大草理乙子
中野順一朗

岩本淳
熊川隆一
武藤直樹

「田中かよっ」と、すぐツッコミが来そうなほど、我ながら腰砕けなタイトルだ。できれば世界の秘密と対決するのは、アイドル魔法使いのハリー・ポッターや、ダ・ヴィンチ・コードの謎を追ったラングドン教授でありたかった。だがその名前は使えないし、田中には田中なりの「世界の秘密」を追う事情があったのである。かくして巻き込まれるオマヌケな事件。そして彼が最後に出会う「世界の秘密」とは・・？　笑いと感動。でも切実すぎて子供は楽しくない大人のファンタジー、「世界の秘密と田中」。田中はあなたであり私である。さあ、田中と一緒に世界の秘密を暴きに行こう。腰砕けになることを恐れずに！（鈴木聡）

スタッフ

脚本・演出　鈴木聡
舞台美術　秋山光洋
照明　佐藤公穂
音響　島猛（ステージオフィス）
衣裳　花谷律子
演出助手　則岡正昭
舞台監督助手　藤林美樹
舞台監督　村岡晋

宣伝美術　芹沢ケージ
　　富宇加淳
印刷　竹内美術印刷
制作協力　ミーアンドハーコーポレーション
票券　後藤まどか
宣伝　吉田プロモーション
制作　山家かおり　吉田由紀子
　　江口紀子　早川晃子

大阪公演共催
サンケイホールブリーゼ
大阪公演運営協力
サンライズプロモーション大阪
北九州公演主催
（財）北九州市芸術文化振興財団
北九州公演共催
北九州市、北九州市教育委員会
企画・製作　**ラッパ屋**

◆ラッパ屋プロフィール

１９８３年、広告会社に勤めていた鈴木聡が学生時代の演劇仲間と結成した劇団。「大人が楽しめる芝居づくり」を標榜し、小劇場には珍しく３０～４０代以上の男性客も多数。「おまぬけなコメディだがキュンときてズンとくる」と評判。演劇ビギナー、演劇マニア、ＯＬ、主婦、業界人、小市民など幅広い層より支持されている。劇団公演としては、今作『世界の秘密と田中』まで32本の新作を上演。東京以外では、大阪、北九州などでも公演している。

◆ラッパ屋主宰・鈴木聡（すずきさとし）プロフィール

１９５９年東京都生まれ。早稲田大学卒業後、コピーライター・クリエイティブディレクターとして活躍。サントリー「ワンフィンガーツーフィンガー」、ホンダ「インテグラ、ノッテグラ」「こどもといっしょにどこいこう？」、キリン一番搾りほか代表作多数。１９８３年、サラリーマン新劇喇叭屋（現ラッパ屋）を結成。現在は、脚本家として、演劇、テレビドラマ、映画から新作落語まで幅広く執筆。代表作は、ミュージカル『阿 OKUNI 国』（木の実ナナ主演）、『魔法の万年筆』（稲垣吾郎主演）、『ザ・ヒットパレード～ショウと私を愛した夫～』（原田泰造・戸田恵子主演）、『寝坊な豆腐屋』（森光子・中村勘三郎主演）、ＮＨＫ連続テレビ小説『あすか』（'９９年放送）、『瞳』（'０８年放送）など。ラッパ屋『あしたのニュース』、グループ・ばる『八百屋のお告げ』で第 41 回紀伊國屋演劇賞個人賞受賞。

お手伝いさん募集　ラッパ屋では、制作のお手伝いをして下さる方を募集しております！ご興味のある方は、是非ご連絡下さい！
ご連絡先　ラッパ屋　TEL&FAX 03-5397-0283　E-mail rappaya@jcom.home.ne.jp

いつも観に来てくださる、素敵な大人の皆さまから、愛あるメッセージをいただきました。ありがとうございます！

人間とはかくも滑稽で、愛おしいものかを描いて早25年。まさに市井の人々を取り巻く出来事を、優しい視点で描き、演じ、人生いろいろあるけれど、明日も頑張ろうと思わせてくれた「ラッパ屋」。劇団員が、みんな還暦を迎えても、古希を迎えても、今度はどんな物語を観せてくれるのだろうと思うと、明日が楽しみです。（映画『フラガール』プロデューサー　石原仁美）

・・・「縁」・・・。かなり以前ラッパ屋の芝居を観に行ったら伊東、小松なる役が活躍していた。聞いてみたら鈴木氏がＴＶでバカやってた我々のファンだったらしい。その縁で二人芝居『エニシングゴーズ』を書いて貰った。さきの戦争での戦友が帰還後奇遇離反を繰り返し乍ら最期を老人ホームで迎える、と言う結構シビアな造りで、あの三木のり平さんが楽屋に寄ってくれて「シロちゃん、何か身につまされるなあ」と言ってくれた。亡くなる少し前の事です。そんなホンを書ける聡ちゃんを、見た目も含めて年上だと思ってました。ゴメン。（喜劇役者　伊東四朗）

私は驚いている。私にこうしてラッパ屋さんへのコメント依頼が来た事を。何故私が大ファンだとバレたんだろう。いつもとてもこっそり観に行ってたのに。ラッパ屋の公演がある時何故だか私は凄く忙しい、とても周囲に「芝居を観に行く」とは言えない。しかしどうしても観たい。ラッパ屋は忙しければ忙しい程観たくなる。疲れてれば疲れてる程その世界にどっぷり浸かって笑って泣きたくなる。それでこっそり誰にも会わないように観に行っていたのだ。私はラッパ屋が大好きだ。これでバレた。次は堂々と観に行こう。（俳優　大泉洋）

けれん味とか、洒脱とか、粋とか。ラッパ屋の芝居が身をもって教えてくれた言葉はたくさんあります。ふぬけた力みかたも、この劇団に教わりました。18歳からずっと、つまり24年間も観続けているのは、ラッパ屋の芝居だけです。（作家　角田光代）

普段はおっとり風な鈴木さんの、おっとりとは程遠い決意表明を読ませていただいた。演劇界の将来を憂いたその言葉……素敵だと思う。そんな憂いの中、実績十分な自劇団で一体何が出来るのかと自問自答するその言葉…立派だと思う。尊いと思う。でも、僕はそんな演劇界にすら感謝する。だって、計らずとも大好きなラッパ屋さんの舞台がいっぱい見れるんだもの。不届きものの全然結構。これが素直な感想です。（演出家・脚本家・俳優・HIGHLEG JESUS 永久総代 河原雅彦）

ミュージカル「阿国」の脚本家として鈴木聡さんと出会ってから二十年。その間、数々の舞台作品やテレビドラマを一緒に歩んできました。その作品の中で鈴木聡さんはいつも、人間の笑顔やヴァイタリティの奥の哀を前向きな姿で描き出してくれました。感謝感謝。私にとっては身内同然のラッパ屋の皆さんと、生みの父親のような鈴木聡さんの新たな挑戦と意気込みに大いに期待しながら、私はひとり客席であったかーい空気に包まれていたいと思います。天下一のラッパ屋に愛をこめて。（女優　木の実ナナ）

「斎藤幸子」を演じられた事は、スペシャルな、そしてまさに“幸せな”経験でした。勝ち組負け組なんて関係ない、バカでもいい、自分の気持ちに正直に生きていい、と幸子は教えてくれました。それから芝居のラストの台詞、「夏のこの時間が一番好き」は、私の知る限り最高の〆め台詞です。舞台上で、実は毎回々々、グッときてました。初日開演前、バリバリに緊張する私に「ま、大体でいいから、だーいたいで。」とおっしゃってくれた鈴木さん。大好きです。ラッパ屋さんのこれからの諸々、応援しています。（女優　斉藤由貴）

「面白いから観たら」。たしか知人に、そんな風に言われたんだと思う。誘われたら、なるべく断らない事を人生のコンセプトにしている僕は、その「ラッパ屋」を観た。そして、笑って。ちょっと泣いた…それ以来欠かさず見続けている劇団だ。懸命に生きる人間は、ズルくて、可愛くて、健気で切ない…そんな芝居を「ラッパ屋」は、そっと観せてくれる。こんな時代だからこそ、小さく叫ぶ人間讃歌が本当に心地良い。（落語家　春風亭昇太）

『ポップに描かれた残酷』や『ひりつくような心の痛み』に少々食傷気味の貴兄に、『甘酸っぱさ』や『ほろ苦さ』といった、どこか懐かしの芝居は如何でしょう。円熟味の増した役者陣が軽妙洒脱の座付き作家と戯れじゃれあい食らいつき、七転八倒の揚げ句にさらりと編み出す和製ジャズ芝居。これから何年かのラッパ屋からは目が離せませんよ！でもって俺も早く出して下さい。（タレント・演出家　ラサール石井）

劇評抜粋

撮影：木村洋一

「あしたのニュース」

「妻の家族」

「ブラジル」

（前略）サラリーマン出身の鈴木聡の作・演出らしく、働く者への目線が温かく、低い。これだけは譲れないという仕事の倫理と信念を、笑いの中に醸し出す。六本木ヒルズはいざ知らず。こんな風に働いている人々が、どっこいいるんだぞ、という庶民への応援歌のようだ。（後略）ー『あしたのニュース』朝日新聞劇評より・山本健一／2006 年 1 月 21 日ー

ホントに馬鹿なんだから……と笑いながら、いい年した大人を、温かく、潤いのある気分に浸らせてくれる。鈴木聡脚本・演出の新作は、そんな気持ちの良い喜劇だ。（後略）ー『妻の家族』朝日新聞劇評より・山口宏子／2007 年 3 月 29 日ー

ラッパ屋を主宰する鈴木聡の作・演出「妻の家族」は、最近の世相や流行を材料に取りこみながら、希薄化する現代の家族関係の人間的ぬくもりを考えさせる。大人を楽しませる成熟した娯楽喜劇として手慣れた作りである。（後略）ー『妻の家族』日本経済新聞劇評より・河野孝／2007 年 3 月 29 日ー

（前略）深刻そうでありながら、どこかくすくすと笑え、爆笑シーンも尽きない。俳優陣の力量も貢献しているだろうが、脚本・演出の鈴木聡の「悩みはあっても最後は何とかなるよ」という楽天的なメッセージが、全編を貫いているからだろう。普通の人々が抱える苦悩の一切合切をのみこむ熱いさざ波として、ボサノバを象徴的に挿入しているところも心憎い。人生に疲れた中高年には持ってこいの一作だ。ー『ブラジル』読売新聞劇評より・旗本浩二／2009 年 1 月 21 日ー